「われから」における美尾像
――出世に心を奪われた女性

王　光紅

はじめに

一葉の数多くの作品の中で、「たけくらべ」（『文学界』明二十八・一～明二十九・一）や「にごりえ」（『文芸倶楽部』明二十八・九）、「十三夜」（『文芸倶楽部　閨秀小説号』明二十八・十二）などはよく研究者に論じられて来たが、晩年の小説、とくに「われから」のほうは知名度も低く、あまり重視されることのない作品だと言っても過言ではない。

「われから」は明治二十九年五月十日に『文芸倶楽部』第二巻第六号の巻頭小説として発表された。樋口一葉の発表された小説の中では「たけくらべ」に次ぐ二番目の長さの小説であり、晩年最後の小説でもある。このように一葉文学をしめくくる特別な位置を占めているにも拘らず、同時代の「三人冗語」[注1]をはじめ、多くの文学者は「われから」をむしろ失敗作と見なしていて、現在もなおこの作品はあまり重視されていない。本論は従来あまり注目されてこなかった「われから」を取り上げ、その再評価を試みるものである。

一、「われから」の評価

すでに述べたように、「われから」は一葉の他の代表作に比べ、知名度が低い作品でもある。その原因の一つはやはり「三人冗語」の評価にあると思われる。明治二十九年（一八九六年）四月に『文芸倶楽部』に一括掲載された「たけくらべ」は、『めざまし草』（第四号）の「三人冗語」で「われは縦令世の人に一葉崇拝の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ稱をおくることを惜まざるなり」[注2]という「第二のひいき」（森鷗外）の絶賛を受けた。一葉の文名はこの評価によって一躍高まった。それに対して、五月の「三人冗語」では「たけくらべには似るべくもあらず、ただにたけくらべのみにあらず、濁り江にも及ばず、わかれ路にも及ばず、十三夜にだにも及ばず。出来不出来はいかなる人

にもある事ながら、一葉としては太く劣りたる作なり」（小説通）と同月発表の「われから」は酷評を受けたのである。二つの作品における評価は雲泥の差であった。そのためか、「われから」はその後あまり注目を浴びないまま、その解読も十分に行われなかったと思われる。

「われから」が以上のような酷評を受けた理由の一つは構造上の欠陥である。それをまず指摘したのも「三人冗語」である。同誌第五号の「三人冗語」は「力負けとも云ふものにや、話の筋は先づ作者の手よりこんがらかりはじめて、何を主とも定かならぬやうになり了りたり」（小説通）と批判した。その後の評論家たちもその影響を受けたようである。例えば、一葉研究に重要な位置を占める関良一氏[注3]も「極めて複雑な長編風の構想」を「この作の失敗の第一の原因」だと見なしている。そして、近年になってもこの小説の構造に対する批判が続いている。例えば、関礼子氏[注4]の「優に二つの小説として分離することができるほどの厚みと奥行きをもつテーマを、強引に一つのテクストにまとめてしまった点」は問題だと述べた。

実は、同じ「三人冗語」の中にも違う声があった。〈美尾物語〉の必要性について、第九回でお町が神前に母美尾に捨てられた父の運命に自己を重ねており、それゆえに、「我が未来を危ぶむ」（ひいき）恐れも表現され、そのためには〈美尾物語〉も欠くことのできない部分だと判断している。だが、その声がやや弱すぎて、看過されがちだったようである。しかし、近年になると、従来の否定的な見解の中にも、肯定的な評価がみられるようになった。

たとえば、渡辺澄子氏[注5]は「女にとって生きづらい明治社会の現実を、境遇の異なる二女性を通して描きたかった一葉にとって美尾物語は捨て去るわけにはいかなかっただろう」と構造の合理性を述べた。また、峯村志津子氏は〈美尾物語〉と〈お町物語〉両者が「決して何の関連もなく無造作に並べられていたのではなく、一対のものとして構想された可能性が浮上する[注6]」という観点を呈示している。

「われから」の中には、大まかにいえば〈美尾物語〉と〈お町物語〉という二つの物語が内在している。この二大物語が存在するということについてはほぼ疑問がないであろう。ただ、以上で述べたように、〈美尾物語〉の存在、或はその必要性に対して、諸説の見解が分かれているようである。私見によれば、〈美尾物語〉は「われから」の構造上欠くことのできない部分だと考えられる。

その理由は二つある。一つは〈お町物語〉との「対比」として、〈美尾物語〉が必要だと思われることである。母親との絆が強い美尾は、子供（お町）を産んだが、貧しい生活に行末が見えない状態である。一方、両親が亡くなったお町のほうは豊かな生活を過しているが、子供がないことで自分は微妙な立場に置か

れている。つまり、美尾とお町には「お金の有無」や「子供の有無」、「親の有無」などについて対比的な生活情況がある。「お金の有無」と「孝の呪縛」の「対比」という構造型について、渡辺氏[注7]も「この二点の差は大きい。実に美尾の出奔はそこに起因する」と論じている。また、構造の複雑さに対して、戸松泉氏[注8]も「その錯綜した人間世界を小説化するという困難な課題に挑戦したのが『われから』だった」という肯定的な視点を示している。

もう一つの理由は、二つの物語が小説の流れの上で「因果関係」にあることである。お町は母の美尾と違い、お金持ちのお嬢様として、とても豊かな生活を過している。しかし、母親の美尾はお町を産んでから四ヶ月後の頃、お町をおいて出奔した。妻の出奔でショックを受けた与四郎も生育期のお町に対しては冷淡な姿勢を持っていた。成長中における両親の「不在」は、お町の心の中に大きな影響を与えたにちがいなく、そのため彼女は精神的に脆弱になったと推測されるのである。この「両親の不在」という背景が構築されるためには、その原因となる美尾の「出奔」が不可欠であることは言うまでもない。

以上、二つの理由から「われから」においては〈美尾物語〉も重要な要素だと思われる。

二、美尾物語

「美尾」という人物に対する評価は、最初の体系的な一葉研究書『樋口一葉論』（至文堂、一九二六年十月）で湯地孝氏が「淫奔な母親の血」と述べ、また、前田愛氏（『大つごもり　十三夜　他五篇』解説、第一刷、岩波文庫、一九七九年二月）も「母親の淫奔な血」と述べているように、美尾には「淫奔」というレッテルが貼られた。美尾像には「淫奔」的なイメージがほぼ定説になっている。

しかし、美尾出奔の原因を究明することは出奔行為を評価することよりもっと肝心ではなかろうか。美尾出奔の原因を具体的に分析したのは渡辺澄子氏である。渡辺氏は美尾の出奔の原因が孝の束縛と貧乏にあると述べた。実は、美尾出奔の原因については、もう一つ見逃してはならないところがある。それは美尾が「お向ふ邸の旦那さまは、其昔し大部屋あるきのお人成しを一念ばかりにて彼の御出世（中略）お前様も男なりや（中略）道を行くに人の振かへるほど立派のお人に成つて下され」（五）と、他人の出世、いわゆる成功を見本にして、夫の出世を期待する本心を洩らした点である。この一節から美尾の「出世」に対する願望が窺える。つまり、「出世」に対する美尾の態度と与四郎の態度から分析すれば、彼女の出奔の原因は「立身出世」に対する執着にあるとも考えられよう。

与四郎はもともと月給八円の大蔵省役人だったが、美人である妻との貧しい生活に満足していて、向上心の殆どない人間であった。「身分は高からずとも誠ある良人の情心うれしく、六畳、四

疊二間の家を、金殿とも玉樓とも心得て」（四）いる美尾も同様に、夫と「平和な家庭を営んでい[注9]」て、仲のいい生活に何の文句もなかった。

しかし、美尾の態度はある日の出来事によってまるで掌を返すように変った。それは美尾が結婚四年目の春四月十七日の花見の時に、華族一行の様子を見たことである。

若き老ひたる扱き交ぜに、派手なるは曙の振袖緋無垢を重ねて、老け形なるは花の木の間の松の色、いつ見ても飽かぬは黒出たちに鼈甲のさし物（後略）（四）

このように華族様の姿を見た美尾は、茫然と立って眺め入った様子、「うすら淋しき様に物おもはしげにて」、とあり、その後に与四郎の言ったことを耳にも入れないようであった。与四郎に「氣分が勝れませぬ」と力なさそうに言って、「逃げ出すやうに」（四）帰ったのである。

このような華族（上流階級）に対して我身をふり返る羞恥意識は作者一葉の中にも同様のものがみられる。一葉は歌を勉強するために、明治十九（一八八六）年八月二十日[注10]中島歌子の萩の舎に入門して稽古を始めた。当時、一葉の父（則義）はまだ警視庁在職で月給二十円から二十五円まで[注11]の程度だったという。しかし、萩の舎の門人達は殆ど上流階級、いわゆる貴族や富豪の家のお嬢様達であった。そのため、萩の舎で一葉は貧富の差、あるいは身分の差を身をもって思い知らされたといってもいいだろう。

例えば、よく知られたエピソードとして、明治二十年二月二十一日における萩の舎の発会当日のことだが、日記には「（前略）目とどめてみてければげにや善盡し美つくしたるきぬのもやうおびの色かがやく計に引つくろひ給ふ（中略）いとどはづかしとはおもひ侍れ[注12]」と、自分の貧しい身なりに対する「はづかし」い気持ちが描かれている。これは一葉が萩の舎の人々との付き合いがある限り、ずっと彼女の心の中にひそかに隠し持たれていた心情ではなかったかと考えられる。そして、一葉はかつての羞恥意識を美尾の心境の変化に再生し、そうした境遇からの脱却を彼女の出奔に仮託したのではないかとも考えられる。

そのような美尾は、美人でありながら「服粧が惡るい」と人に指摘されたが、「八圓どりの等外が妻としては是れより以上に粧はるべきなら」ずと認識しているものの、一方で情けないという内心の気持ちも抑えがたかったのである。その「情けなさ」が昂じた結果、「はかなき夢」（四）への狂信的な憧れになったのではないだろうか。

美尾にとって「はかなき夢」というのはいったい何であろうか。それは前に述べた外見（服装）を恥じなくともよい境遇、すなわち「出世」の願望であろう。しかし、美尾の願望に対して、与四郎は「我が身を罵られし事と腹たたしく」、「お爲ごかしの夜学沙汰は、我れを留守にして身の樂しみを思ふ故ぞ」と妻の本心がわからないままに誤解をして「何うで我れは此様な活地なし」

（五）と自暴自棄のように語る。

「出世」、いわゆる「立身出世主義」は明治期のひとつの中心的イデオロギーである。身分制度の固定された江戸時代には、士農工商という四つの階級がある。一つの階級の中にあった無数の上下関係は原則的には固定していた。「武士の子は武士、百姓の子は百姓。（中略）お殿様の長男は、能力の如何に関わらずお殿様」[注13]。「立身出世」とはいわば〈身分の移動〉もしくは〈身分の逆転〉だから、江戸の封建社会には許されなかったものである。

明治立身出世主義時代の到来を示したのは明治五年八月「学制」の公布だといってもいい。また、この「学制」の中心的な精神を最も明らかにしたのは、言うまでもなく太政官布告第二百十四号の「学制被仰出書（おおせいだされしょ）」である。もっと遡って言えば、明治元年三月十四日に宣告された「御誓文」、いわゆる「五箇条の御誓文」の中に「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス」[注14]という一節からも国の政策として宣伝されている「立身出世」の指向が見える。

当時、中村正直により翻訳された『西国立志編』（明治四年）は福沢諭吉の『学問のすすめ』（明治五年初編）と共に二大啓蒙書となった。この独立独行の自助精神を唱える『西国立志編』の原著はサミュエル・スマイルズの『セルフ・ヘルプ』である。前田愛氏も、「堅実な成功を約束する勤勉と自己鍛錬の美徳」を説く『セルフ・ヘルプ』は「明治の子どもたちに立身出世の教義を啓示した」[注15]と述べる。

「学制被仰出書」の中の「學問ハ身ヲ立ルノ財本共云ヘキ者（学問は身を立つるの財本ともいふべきもの）」[注16]という一句が示しているように「学問」を重んじる明治という新しい時代がやって来た。そうした考え方に基いて、官吏採用制度も変った。

明治二十六（一八九三）年十月三十一日の官報（国立国会図書館デジタルコレクションによる）に公布された「文官任用令」（明治二十六年勅令第一八三号）の「第一條　一　文官高等試験ヲ経テ其ノ合格証書ヲ有スル者」によって、もともとの身分ではなく、試験によって人々の実力を量り、昇進の可能を与える、すなわち「出世」することができる制度が確立されたのである。

そのため、「われから」の中にあるように、「夜学」に通って法律などの知識を習得し、任用試験などに合格して、等外役人から昇級する道を開くことは与四郎において「出世」の道を開く方法だったのである。一葉の他の作品では「十三夜」の主人公お関の弟亥之助も役所勤めをしながら「夜学」に通っている。しかし、このような「立身出世」の可能性は「あくまで男性のものでしかない」[注17]。「文官試験規則」（明治二十六年勅令第一九七号）にも「年齢満二十年以上ノ男子ニシテ」という内容がある。美尾の「お前様も男なりや」や「私は其爲になら内職なりともして」（五）などの言葉も「出世」が男性中心のものであることを物語っていて、示唆的である。つまり、美尾自身がいかに「出世」を望んだ

としても、女性である彼女には実現しようがなく、男性である夫与四郎がその気になって努力しないかぎり「出世」は望めないのである。「出世」に対する美尾と与四郎の捉え方の違いが夫婦の間の諍いと離別（出奔）の原因になったのである。

それでは、〈美尾物語〉の中に「出世」はどのような意味合いを持っているのか。美尾と与四郎の間の「出世」に関する会話が発生した時期はちょうど美尾が「華族一行」に衝撃を受けた時から、「梅見の留守」、つまり「實家の迎ひとて金紋の車の來」（五）た時までの時期である。実家から帰った後、美尾は、以下のような様子となる。

兎角に物おもひ靜まりて、深くは良人を諫めもせず、うつうつと日を送つて實家への足いとどしう近く（五）

この描写からすると、美尾は実家において「貧乏」生活から脱する方法を母からそれとなく入れ知恵された可能性が高い。

その後、美尾は妊娠したことが判明するが、美尾の母は世話係として美尾と与四郎の家に入り込み、次のような態度を取るのである。

此上小兒が生れて物入りが嵩んで、人手が入るやうに成つたら、お前がたが何とする、美尾は虚弱の身體なり、良人を助けて手内職といふも六ツかしかるべく（六）

このように美尾の体が虚弱だという理由で、美尾に内職させることを断っている美尾の母は、娘に生活の苦労をさせたくないと考えているのではなかろうか。それにしても、美尾の母は、やはり娘の結婚生活の余禄として自分の将来（老後）における経済的な保証をもらおうとする私心を持っているといえるだろう。もともと大蔵省の役人である与四郎と美尾の結婚を認めたのも与四郎が役人として将来に昇進する、いわゆる「出世」の見込みがあるからではないかと考えられる。だから、「美尾は私が一人娘、やるからには私が終りも見て貰ひたく」（六）というのは美尾の母の本心であろう。しかし、娘と結婚した与四郎は現状に満足しており、子供も生まれたのにもかかわらず、「出世」への渇望は一切沸いてこなかった。母親は贅沢な生活が送れるどころか、約束したお寺参り程度の小遣いもままならない。生活のために恥ずかしさを忍びながら、他人の口入れや手伝いをしなければならない。「金紋の車」に乗れるぐらいの地位にある人、言わば、「つねづね御懇命うけましたる從三位の軍人様」（七）と知合いになったのも口入れや手伝いをしている間ではないかと思われる。美尾の母は、美人である娘がもし軍人様のような「出世」した人の「妾」になれば、自分たちの生活が安定するという意味の「出世」も達成できるという考えを持っていたのではあるまいか。

また、「出世」という言葉が最も劇的に現れるのは、「にごりえ」の結城朝之助がお力に向かって「お前は出世を望むな」（六）という場面である。この一句は、肯定・否定と諸説あるが、私見では、朝之助はお力の本心を見抜いた感嘆、つまり「お前は出

世を望むのだな」という意味だと考えられる。そのことは、朝之助とお力との会話の中からいくつか読み取れるだろう。例えば、二人が初めて会った日の会話に、お力は「天下を望む大伴の黒主とは私が事」（一）と言うが、本音を冗談のふうに言い出したと考えられる。また、お力には「我戀は細谷川の丸木橋わたるにや怕し渡らねば」（五）という歌を歌って、祖父と父を思い出す場面がある。お力の祖父が生きていた時代に関して、詳しく検証することが難しいが、江戸期の終りから明治初年が該当するであろう。[注18] お力の祖父は「四角な字をば讀んだ人で」あって、「世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて斷食して死んだ」が、本が出せる位の学識、いわゆる学問のある人である。「十六の年から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して」（六）というように、向上心、言い換えれば、「出世」という志を持っているが、それを果す事なく、「人の物笑ひに今では名を知る人もな」（六）い人間である。お力の父といえば、「細工は誠に名人」（六）と言えるほどの職人だが、親子三人の衣食も保証できない。ということからみれば、祖父と父二人とも「出世」できるはずの才能があるが、結局、「出世」のできない人間である。「父さんも踏かへして落てお仕舞なされ、祖父さんも同じ事であつた」（五）とあるが、お力にとって、歌に言う丸木橋を渡ることはおそらく「出世」のことではないか。「幾代もの恨みを背負て出た」（五）お力のしなければならないことも、どうかして自分なりの「出世」を達することではないかと考えられる。朝之助の話を聞いたお力の「ゑッと驚きし様子」（六）も本心が見破られたときの生の反応であろう。のちに、一葉は「わかれ道」（「国民之友」明二十九・一、巻末付録「藻塩草」）において、主人公のお京が按摩の「伯父さん」の「口入れ」で「何處かお邸へ御奉公に出る」名目で「妾」になると決断し、お京は彼女を慕う吉に「喜んでお呉れ、悪い事では無いから」と述べる物語を書いている。このお京と同様、美尾もまた母の「口入れ」によって「将軍様」邸に御奉公の名目で「妾」になった可能性が高い。

美尾が華族一行に出会ったという出来事は、逆に彼女の母にチャンスを与えたと言ってもいいと考えられる。なぜなら、そのことから、母は美尾と与四郎の夫婦関係の隙間が見え、そこに入りこめる機会を得たからである。美尾が華族たちと出会ったのは結婚四年目の四月、母親の急病と称して美尾が留守をしたのは結婚五年目の二月である。この間に十ヶ月の時間がある。この十ヶ月の間に、美尾は夫の与四郎に向かって「豪い方に成って下され」（五）という言葉を発したこともあれば、「私にも生れた家が御座んする」（四）という喧嘩ごしの言葉もある。夫婦喧嘩の際、美尾はおそらく実家のことを思い、実家に帰って「出世」の可能性が低い与四郎との別れ話について母と相談した可能性があるだろう。

美尾を実家に帰らせた母の急病は、その前に一度も起ったこともない「癪」であるが、タイミングからみれば、それは仮病（嘘）だった可能性が高い。実家に帰った美尾は、母親の心の中に潜めた出奔という形の（実は妾になる）計画を聞かされたのではないか。美尾は帰った後、「吐息をつく」ようになった。美尾のこの「吐息」は、自分を愛してくれた夫を捨て、「出奔」の形をとって実は「妾」になるという二重の裏切りに対する申し訳なさとためらいとからであろう。

その後、美尾の妊娠で母は美尾の世話をし始めたが、与四郎の「出世」を促すために「三人居縮んで乞食のやうな活計をするも、餘り賞めた事では無し」（六）と言うのである。「立身出世」が中心的イデオロギーとしてもてはやされる社会的雰囲気の中では「出世」しないことは一種の恥にもなる、というような意識は美尾たちだけではなく、当時の多くの人々の心に刻まれているものだった。

ところで、美尾の母は娘夫婦の離婚を画策し、美尾を子ぐるみ自分の手に預かろうとしている。これはいささか奇妙だと思われる。母自身は口入れや他人の手伝いをして、ぎりぎりの生活状態であることを思えば、娘と孫を自分の手元に置いて、生活するとなれば、さらに困窮した状況になるはずであろう。それはひとつには意気地のない婿に対する感情的な言葉であったろうが、さらに考えれば、美尾を妾に行かせることを前提として、美尾の母はすでに「従三位の軍人様」から経済的な援助をうけていたとも考えられるであろう。

しかし、与四郎はそのような美尾の母の疑わしい言葉に何の危機感も感じないまま、悪びれることなくただ格好をつけて「私とても男子の端で御座りますれば、女房子位過ぐされぬ事も御座りますまいし（中略）其邊格別の御心配なく」（六）とありきたりの言葉を発するだけであった。与四郎に「出世」の望みがないことに絶望した母は、「美尾は私が娘なれば私の思ふやうに成らぬ事は有るまじ」（六）と思い、親としての権威をかさに着て、ひそかに娘の出奔を勧めた可能性が高いと思われる。

お町を出産した後、美尾の「日々に安からぬ面もち、折には涕にくるる事もある」（七）という様子を見れば、美尾は迫ってきた別離に対して相当につらい気持ちにおそわれている。つまり、頼りにならない夫の「出世」と自身の「出世」に対する願望と「孝の呪縛」という大きな三つの煩悶を抱えながら美尾は出奔せざるを得なかったのである。母が知り合いの「従三位の軍人様」の「御榮轉」に従って京都に移った一ヵ月後に、美尾は紙幣二十枚と手紙一通を残して出奔する。美尾の母は美尾夫婦に別れを告げるとき、与四郎の引き止めの言葉に対して「いやいや其様の事はお前様出世の曉にいふて下され、今は聞ませぬ」（七）と返答している。この言葉からすれば、美尾の母はすでに与四郎の「出世」に対して断念していたことがわかる。したがって、美尾出奔

における最初の原因は与四郎の「出世」に対する母娘二人の絶望にあると考えて間違いないであろう。こうしてみると、美尾の出奔は「出世」というキーワードが深く関わっていることが明らかである。

以上のことから、美尾出奔の原因は美尾と与四郎の「立身出世」に対する考え方の差異に発していると考えてもいいと思われる。

おわりに

小説「われから」には〈美尾物語〉と〈お町物語〉の二つの対比的な物語が内在しているが、従来の研究の多くは〈お町物語〉に中心を置き、お町の母である美尾を淫奔な女性と見なす傾向が強かった。しかし、作品「われから」の中における〈美尾物語〉のやや大きすぎる割合と美尾に関する陰影に富んだ詳細な心理描写からすれば、美尾という人物の造形に対し、一葉が相当に大きな力を入れていることも感じられる。その点からいえば、美尾も独自の人格や考えを持っている一個の女性であり、〈美尾物語〉にも一葉の社会や女性に対する考えが深く含まれていると考えられる。

一葉の作品の中には多様な人妻像が描かれているが、美尾はやはり独特の存在の一人である。たとえば、「十三夜」のお関、彼女は夫原田に虐げられ、いったんは離縁を決意するものの、父の説得に折れて仕方なく婚家に戻る人妻、また、「にごりえ」で内職しながら一家を養っている世話女房のお初など、広い意味での従順な良妻賢母型の人妻たちと違って、美尾は良妻でも賢母でもないような女性に造形されている。良妻賢母の基準で美尾を評価すれば、夫を裏切り、生れたばかりの子供を捨てて出奔した彼女は勿論失格者である。だが、そうした世間の一般的な基準を捨て、美尾を一個の人間として考えれば、彼女の気持ちや行動も少しは理解できるだろう。同じ人間であるのにもかかわらず、当時は男性だけに社会的地位の向上が可能な道が開かれた家父長制の色濃い時代において、また従属的、閉鎖的な地位に置かれた女性像からすれば、美尾の選んだ道（出奔）はきわめてユニークだといえよう。女性の出世が、「出世」した男性との結婚、いわゆる「玉の輿に乗る」ことや、あるいは、妾になること、そうした道だけが女性にとって唯一ありうる「出世」である。美尾と母はそうした現実を認識したからこそ、「出奔」の道を選んだと考えられる。しかし、美尾の場合、一般的なケースとやや違うのは、独身の身を「妾」に囲われた（「わかれ道」のお京）わけではなく、貧しいながらも「人妻」という現状の立場をみずから投げうって（出奔して）敢えて「妾」の道を選んだのである。いってみれば、不退転の決意で「妾」という日陰者の境遇に自分の将来を賭けたわけで、そこに美尾の「出世」に対する強い願望をうかがうことができる。このように、一葉の作品には女性における「出世」と

いうことが何度も形を変えて描かれていると思われる。その出世にまつわる女の処し方が、「われから」にも引き継がれ、やや過激な形で〈美尾物語〉が形成されたとも言えよう。こうした美尾の生きざまとは対照的に、娘のお町は夫金村恭助にすがるだけの旧来型の柔弱な人妻である。とはいえ、母娘である以上、お町もどこかで母美尾の激しい生き方と繋がるところがないともいえないだろう。たとえば物語の末尾で、夫の裏切り（妾のお波とその子供がいること）と離縁の計略を知ったお町が珍しく「はたと白睨む」で「一念が御座りまする」と発した言葉には美尾の娘としての激しい気概があらわれているとも考えられる。

一葉は、美尾とお町、母娘二人の女の「出世」に対する対照的な人生を並べ、男性にしか「出世」の道が開かれていない時代の女性の苦闘を描いてみせた。娘お町の人生が、最後の一句を除けば、抑圧された当時の一般女性のリアルな姿であるのに対し、母美尾が選んだ「妾」への異例の決断は、時代の制約をわずかでも突破しようとする女性のささやかな試みであったろう。物語の主体が〈お町物語〉にありながら、それと匹敵するほど大きな割合で〈美尾物語〉が描かれたのは、その秘めたる激しさこそ一葉の内心に潜む本音だったからではあるまいか。

注

注1：森鷗外主宰の雑誌『めざまし草』第三～七号（明二十九年三月～七月）において、鷗外、幸田露伴、斎藤緑雨の三人が行った作品合評である。〈頭取〉（鷗外）による作品紹介に続いて、〈ひいき〉〈さし出〉などの変名の人物が批評する形式をとる最初の匿名座談会形式の文芸時評である。当時の批評界の権威として、多くの作品を辛辣に批判した。

注2：森林太郎『鷗外全集　第二十三巻』（岩波書店　昭和四十八・九）四八八頁　次の引用は四九六頁

注3：『樋口一葉　考証と試論』（有精堂　昭和四十五・十）六十九頁

注4：「物語としての『われから』」（『立教大学日本文学』第五十七号　一九八六・十二）一三四頁

注5：「一葉文学における新たな飛躍――『われから』論」（『樋口一葉を読みなおす』学藝書林　一九九四・六）二五四頁

注6：『一葉文学の研究〈岩波アカデミック叢書〉』（岩波書店　二〇〇六・三）一七八頁

注7：同注5。

注8：「『われから』―〈小説〉的世界の顕現へ」（『複数のテクストへ　樋口一葉と草稿研究』翰林書房　二〇一〇・三）二九六頁

注9：青木一男「『われから』―人妻物語への試み」（特集　樋口一葉―これまでの、そしてこれからの―作品の世界）（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇三・五）一四八頁

注10：塩田良平『樋口一葉研究〈増補改訂版〉』（中央公論社　昭和四十三・十一）八〇三頁

注11：同注10。八〇一頁、八〇三頁

注12：塩田良平・和田芳恵・樋口悦　編『樋口一葉全集　第三巻（上）』（筑摩書房　昭五十一・十二・十五）。五頁

注13：羽鳥徹哉「作家の魂―日本の近代文学―」（勉誠出版社　平成十八・四・一）二十三頁
注14：『法令全書　慶応三年』（内閣官報局　明二十）六十四頁
注15：「子どもたちの時間『たけくらべ』」（『樋口一葉の世界』筑摩書房　一九八九・九）二六六頁、二六七頁
注16：長尾景弼 編「類聚法規別集　第三巻」（博聞社　明十七・二）三八二頁
注17：菅聡子『時代と女と樋口一葉―漱石も鷗外も描けなかった明治』（日本放送出版協会　一九九九・一・二十）二五八頁
注18：新日本古典文学大系明治編二十四『樋口一葉集』（岩波書店　二〇〇一・十）における菅聡子氏の校注による。二六一頁

✿本稿における本文の引用は、『樋口一葉全集』（筑摩書房　昭和四十九年九月）による。引用に際し、一部の旧字体は新字体に改め、ルビは省略した。

王　光紅（おうこうこう）大学院博士前期課程在学